

## 別子文藝の座談会

令和6年6月9日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### はじめに

昭和27年の9月号が創刊号と推測される「別子文藝」の1周年を記念して、生活様式、風俗、習慣をテーマとして「旧別子を語る座談会」が、山の古老、生き字引と呼ばれる4人を招いて開かれた。第2巻10号(昭和28年12月発行の10月11月合併号)に掲載されていたので、別子銅山での生活の様子が垣間見られるので紹介する。原文は話し言葉そのままなので、ある程度まとめた。

別子銅山記念図書館には創刊号が欠落しているので2冊目の10月号から推測する。

### 1. 開催の日・場所・出席者

時・所 昭和28年9月14日 19時50分から 東平荘  
出席者 青山課長、伊藤課長、木下、河合、美野、小池、堀井  
ゲスト 木村佐吉 (63歳) 明治23年生まれ (東平荘勤務)  
村尾吉次郎(63歳) 明治23年生まれ  
宮武甚七 (66歳) 明治20年生まれ  
藤原ハル (76歳) 明治10年生まれ

### 2. 座談会で語られた事柄

#### 正月行事

木村 「お正月の行事では、一番は何といても今の大鉾式のように大鉾小鉾を作って、大鉾を東延からずらして氏神さんまで運んで祝った。それから小鉾は大阪へ送って大阪でも同じようにしていた。」

「はなは、所長・副所長はじめ等内七等以上の人たちが、学校の講堂に集まって鉾祭式をした。正面には住友家長公夫妻の写真を掲げ、年頭のあいさつをした。奉賀帳にそれぞれ名前を書いてから大鉾の五つの歌を歌った。これが大きな行事でした。それが終わってから戻ると課長、係長、坑夫頭というような人たちが集まって、住友さんの宴会が始まった。」

東延時代に大鉾を運んだ氏神は、目出度町に鎮座している大山積神社である。

(芥川三平「資料・詩歌集・別子銅山」の中の「大正4年以前の旧別子時代」項目の中で、目出度町の大山積神社まで運んだと記述している。)

小足谷小学校の長い建屋内には8教室と雨天体操場があった。講堂と言っているのは、雨天体操場のことで、住友の宴会は接待館で開催された。

(昭和 30 年 1 月号「木村翁の語る別子銅山―第4回」の正月風景の中で、大山積神社、接待館と述べている。)

### 結婚

村尾 「7、8 銭のお酒一升持っていくのは大分いい方で、あそこの娘が良いぞということになると他の若い衆も手伝って、家へ押しかけて娘さんを担ぎ出した。こうして担ぎ出しさえすれば、ちゃんと夫婦いうことになった。男女とも 16、17 歳からぼちぼちと身を固めていた。」

### 山神祭

木村・村尾 「山神祭は只盛大というよりほかに言葉はない。」

木村 「昔は歌舞伎がお祭りには必ず来た。それから相撲。歌舞伎と相撲は大したもんだった。」

村尾 「東京相撲の大関あたりが来た。それぞれひいきの力士に花をはずんだ。力士の方も山に来ると名前の入った盃等を配ったので、皆も力士をひいきにして花をはずんだ。力士も大分銭を作っておった。」

村尾 「芝居の方もまた大変だった。各配場毎に分かれて飯場頭が勢力を争っていたので、芝居を見に行っても、芝居などを見ずに舞台を背にして酒を飲む。その挙句に喧嘩が始まる。」

村尾 「山中取締役というのがいて、襟元に山中取締役と書いた法被を着て、折紺のパッチ姿で仕込み杖を持ってデーンと構えて見張っていた。」

### 劇場

村尾 「山林課と土木課の倉庫をぶち抜いて四千人くらいは入れた所で芝居をやった。」

木村 「それは広かった。何せ、つんぼ<sup>1</sup> 敷敷というのがある、そこに居たら台詞などはてんで聞こえなかった。」

古い説明板では 2000 人収容。新しい説明板では 1000 人超を収容。

旧別子の桁棟は 10.0 間×20.0 間=200 坪

旧別子の下屋の推計は 14.5 間×24.0 間=350 坪

東平は 222 坪で 2042 人収容、四阪島は 187 坪で 1400 人収容である。旧別子の 350 坪なら 3000 人収容の数字が計算される。

### 学校

\*\* 「学校は小足谷に本校があつて、目出度町に分教場があつた。分教場は尋常 4 年生まで、本校には高等科もあつた。それから学校には講習所という夜学があつた。大体、中学 3 年程度の教育で、会社の給仕等が行っていた。坑夫で最初に行ったのは

私です。(木村か村尾のどちらか)」

「学校は行っても行かなくても良いというやつで、尋常を卒業するのが少なかった。高等科などに行くのは3、4人だった。学校なんかよりも早く一人前の坑夫になって鉱山で働くことにあこがれていた。」

「先生は1年生と2年生、3年生と4年生と兼務だったと思う。いい先生がそろっていた。」

「国家の以って富国安康なるゆえん」と学制の制定は明治5年。私立足谷小学校の開設が明治8年。高等小学校の設立は設が明治22年。

### 遊び

宮武 「イチゴやタシッポを取りに良く山に行っていた。」

木村 「戦争ごっこも良くやった。」

村尾 「蘭塔場の横に石垣を作ってお城やと言って、芝居で見た立ち回りをまねて刀を振り回して遊んだ。」

\*\* 「独楽やお手玉もあった。」

「木村翁の語る別子銅山一第四回」の正月風景の中では、凧揚げ、竹馬乗り、羽根つき、てまり、カルタなどが述べられている。

### 女子衆

藤原 「女子衆も前垂れを背中にやって、その上にカマスを四ツ折りにして乗せ、坑内で掘った鉛を明かりまで負うて出た。下は腰巻一つだった。」

「品位の良い鉱石を出す一等級の人で23銭から24銭。平均10貫匁くらいを負うて21銭なりが日給だった。その当時、米一升が5銭5厘だった。」

明かり: 明るい所をいう意味で坑口のこと。

10 貫匁は 37.5kg

### 別子大水害

藤原 「別子大水害があったのは、私が22歳の時でした。夜中の12時ころにゴーという地響きがしたと思うと、いっぺんに山の裏側から山津波が来た。前の方からは『出られんぞー、出られんぞー』後ろの方からは『助けてくれー』の声が聞こえて、あんな恐ろしいことは無かった。明治40年の暴動の時は接待館に居たが、これもまた恐ろしかった。」

### 入浴場

\*\* 「風呂は男女混浴で、今のように電気設備もなかった。少し遅れて行くと鉛の粉が浮いていて真っ黒だった。」

## つべ押

\*\* 「小池支配人の毎日の山道の往復には、『つべ押し』と称して、後ろからお尻あたりを押す係がいた。米太郎という先輩の仕事であった。」

### 3. 別子銅山記念館所蔵の別子文藝

S. 27 年 10 月号	S. 28 年 3 月号	S. 29 年 1 月号	S. 30 年 1 月号
	10・11 月合併号	2 月号	12 月号
	12 月号	3 月号	
		4 月号	
		5 月号	
		6 月号	
		7 月号	
		8 月号	
		9・10 月合併号	
		11 月号	

#### おわりに

座談会はテープを回して録音していた。昭和28年には、すでに東平にはテープレコーダーがあった。小学校でテープレコーダと出会ったのは、昭和35年だから7年も早い。東平は町場の小学校よりも進んでいた。

東平では明治から大正にかけて雑誌「遠鳴」が発刊されていたので、「別子文藝」が戦後に東平で刊行されたのは、文化の遺伝子ともいうべきものである。角野町図書館所蔵の「別子文藝」が、合併して新居浜図書館に16冊があるのも奇遇である。

座談会の発言は「 」で表記されているが、文章の間で発言者の描写があるだけなので、誰の発言か判明しにくかった。前後の続きから読み解いた。発言者は別として、当時の旧別子の生活の様子が読み取ることができたので、貴重な資料であった。